

英語コーパス COHA に見る引用導入表現 *be + like* の用法の変遷

溝上瑛梨(近畿大学)

1. はじめに

本研究の目的は、大規模英語コーパスを用いて、直接語法を導く *be + like* 表現の主語の人称と時制形式について通時的な変遷を調査することである。引用導入表現 *be + like* の用法の変化を通時的に扱った先行研究では、文法的主語について、1 人称主語から 3 人称主語への拡大を主張するものもあれば、一貫して 1 人称主語が好まれるとの結果を示すものもあるなど、結論に揺れが見られる。その原因として、比較的短期間の調査に留まっていること、また特定地域の話者による引用 *be + like* の用例をもとに議論していることが挙げられる。また引用 *be + like* の時制形式について通時的視点で分析した研究は、カナダ英語において現在形から歴史的現在形へと、好まれる時制形式が変化すると指摘している。しかし、カナダ英語以外に、引用 *be + like* が結びつきやすい時制形式の変遷を、通時的に扱った研究は見当たらない。したがって本研究では、引用 *be + like* が使用される際の文法的主語と時制形式の通時の変化を、アメリカ英語を対象とした、約 200 年分の言語データを有する大規模英語コーパス Corpus of Historical American English (COHA) を用いて調査を行った。

2. 引用導入表現 *be + like*

まず、引用導入表現 *be + like* について説明する。引用 *be + like* は 1980 年代頃にアメリカ西海岸で発生したと考えられており、こんにちに至るまで急速に普及した表現である(澤田, 2011)。この表現が使われ始めた頃は、内的思考を直接引用するのが主な用法であると指摘されている(Schourup, 1982)。しかし現在では、内的思考だけではなく発話の引用も見られ(Romaine & Lange, 1991)、若年世代、特に 20 代以下の話者が使用者の中心である(Sinlger, 2001)。語形としては、*be* 動詞が時制、アスペクト、また主語に合わせて変化し、それに *like* が続く(D'Arcy, 2017)。なお、*to* 不定詞形や分詞形は、用例は確認できるもののどちらかといえば稀な形式である。文の中では、直接語法による被引用句の直前、つまり *say* や *think* 等の伝達動詞と同じ位置に来る。以下に、COHA から引いた用例を示す。

- (1) a. And then, on our way there, she plopped down on the steps that we passed. And she was like, “I don’t want to go to the party.”
a’. And she said, “I don’t want to go to the party.”
?a”. “I don’t want to go to the party,” she was like.
b. And in my head, I was like, “Well, is there a reason why you’re a dick?” But I didn’t say that because there are kids here. I said something better.
b’. I thought, “Well, is there a reason why you’re a dick?”

(1a)では、“she”で指示されている人物による過去の発話を、*be + like* で引用している。(1b)は、初めの“in my head”という表現や、被引用句の直後の“I didn’t say that”から、*be + like* 表現は思考を引用していると分かる。それぞれ、(1a)は発話の伝達動詞 *say* に、(1b)は思考の伝達動詞 *think* に入れ替えが可能であり、それを示したのが(1a’)と(1b’)である。なお、*say* や *think* は被引用句の直後に伝達節が置かれることもあるが、(1a’)で示したように、*be + like* を被引用句の直後に置くことは極めて困難のようである(澤田, 2011)。

新規表現である引用 *be + like* が瞬く間に普及した要因の一つに、従来の伝達動詞 *say* 等とは一線を画する機能を持ち得たことが考えられる。すなわち、*say* は元発話を一言一句違わずに伝える、正確な引用を指向するのに対し、*be + like* はそうした引用の正確性は含意しない(Buchstaller, 2001)。引用 *be + like* は元発話の内容よりも、元発話時の話し手の感情や、発話場面の再現に焦点を置いた表現だとされる(澤田, 2011; 白水, 2012)。

3. 先行研究

次に、引用 *be + like* の主語の人称や時制形式を扱った先行研究を概観することにより、この調査で明らかにすべき問題点を浮かび上がらせたい。Ferrara and Bell (1995)の研究は、引用 *be + like* の主語の人称が、経年によりどう移り変わったかを調査している。分析対象としたのは、アメリカのテキサス州在住の話者によるナラティブで、データは 1990 年、1992 年、1994 年に採集された。1990 年の段階では、得られた *be + like* の用例のう

ち 62%が 1 人称主語を伴っており、3 人称主語は 29%であった。1992 年のデータでは、1 人称主語は 60%、3 人称主語は 33%となっており、1990 年と類似する結果になった。しかしながら、1994 年のデータでは、1 人称主語は 51%、3 人称主語は 47%と変動が見られ、3 人称主語に用法が拡大していることが分かった。

またカナダ英語を調査した Tagliamonte and D'Arcy (2007)の研究では、引用 *be + like* を用いる際に好まれる主語の人称と時制形式の変化を追跡している。分析されたデータは、カナダのトロントで生育した話者のみを対象とし、その発話データを 2002 年と 2003 年に集めたものである(Tagliamonte and D'Arcy, 2007)。分析にあたり、データ収集時に 30 歳代だった話者が注目された。というのも、2000 年代に 30 歳代だということは、*be + like* 表現が使われ始めた 1980 年代の初めにはティーンエイジャーであり、この表現を使い始めた最初の世代だと考えられるからだ。よって 30 歳代の話者をステージ 1、20 歳代の話者をステージ 2、17~19 歳の話者をステージ 3 と区分し、ステージ間の *be + like* の用法を比較した。これにより、発話データそのものは共時的なデータであるが、用法の通時的変化を追うことができる。この場合、ステージ 3 が最も新しい用法となる。その結果、文法的な主語については、どのステージにおいても 1 人称主語が好まれていた。また時制形式についてはステージ 1 では現在形、ステージ 2 や 3 においては歴史的現在形が好まれていた。つまり、引用 *be + like* の主語としては常に 1 人称の頻度が高く、好まれる時制形式は現在形から歴史的現在形へと遷移していたことが分かった。

さらに、引用 *be + like* が用いられる際の時制形式について先行研究を検討したい。先述のとおり、アメリカ英語について、引用 *be + like* が結びつきやすい時制形式を通時的に観察した研究は見当たらず、共時的観点の研究が多い。それらの調査において、引用 *be + like* は、Tagliamonte and D'Arcy (2007)と同様、現在形や歴史的現在形での使用が多いと結論づけられている。例えば、コーネル大学関係者の会話データを分析した Blyth, Recktenwald, and Wang (1990)では、引用 *be + like* は現在形で用いられる傾向にあるとされる。またニューヨーク在住の話者の会話データを扱った Singler (2001)は、過去形よりも現在形、特に歴史的現在形で頻繁に引用 *be + like* が現れると指摘している。Tagliamonte and D'Arcy (2007)の結果と合わせると、引用 *be + like* は、アメリカ英語においてもカナダ英語においても、一般的に歴史的現在形を含む現在形との結びつきが深いと考えられるだろう。しかし、そのように結論づけるのは早計である。というのも、Blyth et al. (1990)ではコーネル大学関係者、Singler (2001)ではニューヨーク在住者といったように、限定的な地域の話者の言語データしか検討されていないからだ。Ferrara and Bell (1995)が取り扱ったコーパスも、4 年分のデータである。よって、これらの先行研究だけでは、アメリカ英語における引用 *be + like* の通時的な用法の変遷を結論づけるには不十分と言える。そこで、対象とする時間幅が広く、話者の属性を限定しない大規模英語コーパスを用いて、アメリカ英語での引用 *be + like* の通時的な用法変化を、主語の人称や時制形式に着目して観察することにした。

4. コーパス調査

調査に用いたのは Corpus of Historical American English (COHA, <https://www.english-corpora.org/coha/>)で、これは 1820 年代から 2010 年代後半までに産出された、4 億 7500 万語以上のアメリカ英語による言語データを収録する。小説や雑誌等の書かれたデータから、テレビドラマやニュース番組等の話し言葉まで、様々なジャンルのデータを含んでいる。今回の調査では全ジャンルを対象とし、検索文字列を[be] like , *とした。先に述べたように、*be* 動詞は主語、時制、アスペクト等によって変化するため、レンマ形で検索する必要がある。COHA の場合は、動詞の原形を角括弧に入れることで、レンマ検索が行える。次に、*be + like* が引用導入として用いられる際、被引用句との間にコンマ(,)が付されることが多いため、あらかじめコンマを含めて検索した。最後に、通常、直接話法による被引用句は引用符に入れられるが、一重引用符と二重引用符の両方が用いられる可能性があるため、この部分をワイルドカードとした。[be] like , *の検索結果として 2402 件が得られ、そのうち直接話法を導く *be + like* の用例は 884 件あった。この 884 件について、10 年単位の年代ごとに用例数・主語の人称・時制形式を分類した。

まず年代ごとの出現件数を示す。

表 1
年代ごとの引用 *be + like* の出現件数

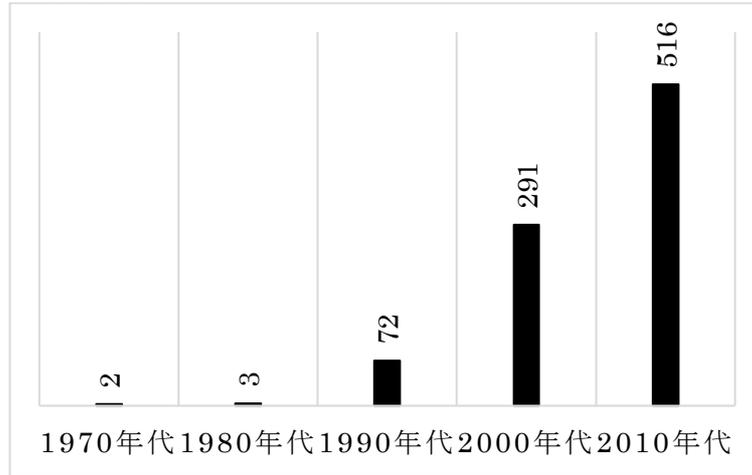


表 1 に示したように、1970 年代は 2 件、1980 年代は 3 件、1990 年代は 72 件、2000 年代は 291 件、2010 年代は 516 件の引用 *be + like* の用例が見られた。引用導入として *be + like* が使われ始めた 1980 年代周辺は極めて用例数が少ないが、1990 年代から急激に件数が増え、この表現が普及していったことが分かる。

次に、*be + like* 表現の主語の人称について、年代ごとにまとめる。なお、*be* 動詞が分詞形等で用いられている場合は、文法上の主語とした。

表 2
年代ごとの引用 *be + like* の主語の人称

		1970 年代	1980 年代	1990 年代	2000 年代	2010 年代
1 人称	単数	1	0	34	134	223
	複数	1	0	2	12	21
	小計	2 (100%)	0 (0%)	36 (50%)	146 (50%)	244 (47%)
2 人称		0	1	0	20	29
	小計	0	1 (33%)	0 (0%)	20 (7%)	29 (6%)
3 人称	単数	0	1	28	98	162
	複数	0	1	8	27	81
	小計	0 (0%)	2 (67%)	36 (50%)	125 (43%)	243 (47%)
各年代の合計		2	3	72	291	516

注. 小計の横に記した括弧内のパーセンテージは、「各年代の合計」に対する割合を示す。

表 2 では次のことが示された。すなわち、1970 年代は 1 人称のみ(100%)であった。1980 年代は 1 人称が 0%、2 人称が 33%、3 人称が 67%。1990 年代は 1 人称が 50%、2 人称が 0%、3 人称が 50%。2000 年代は 1 人称が 50%、2 人称が 7%、3 人称が 43%。2010 年代は 1 人称が 47%、2 人称が 6%、3 人称が 47%という結果になった。各年代で 1 人称主語と 3 人称主語は同程度に出現しており、特に 1990 年代からは、どちらも 50%近くを占める。また 2 人称主語は件数が少ないことが分かった。この結果は、どの世代においても 1 人称主語が好まれるとした Tagliamonte and D’Arcy (2007)の結論とも、1 人称主語から 3 人称主語への用法の拡大を述べた Ferrara and Bell (1995)の結論とも異なる。長期的に観察すると、少なくともアメリカ英語においては、発生の初期段階から引用 *be + like* は、主語の人称に対して選好はほとんどなかった可能性が指摘できる。

最後に過去時制と現在時制での出現件数を年代ごとにまとめる。この分類では、*be* 動詞が分詞形等で現れており、時制形式が不明の用例は「その他」に示している。

表 3

年代ごとの引用 *be + like* の時制形式

	1970 年代	1980 年代	1990 年代	2000 年代	2010 年代
過去形	0 (0%)	0 (0%)	39 (54%)	159 (55%)	282 (55%)
現在形	2 (100%)	2 (67%)	26 (36%)	97 (33%)	150 (29%)
その他	0 (0%)	1 (33%)	7 (10%)	35 (12%)	84 (16%)
各年代の合計	2 (100%)	3 (100%)	72 (100%)	291 (100%)	516 (100%)

注. 括弧内のパーセンテージは、「各年代の合計」に対する割合を示す。

表 3 では、引用 *be + like* の用例数が急激に増え始めた 1990 年代より、全件数のうち約 55% が過去形、30% 程度が現在形で使用されていることが分かった。この結果についても、現在形や歴史的現在形との結びつきを指摘する先行研究と一致しない。さらに本研究に先立って行った調査とも異なる結果となった。先行調査では、1990 年から 2019 年までの言語データを収集した英語コーパス *Corpus of Contemporary American English (COCA)* を用いて引用 *be + like* の時制形式を分類し、全出現件数に対して過去形は 44%、現在形は 48% という結果を得た (Mizokami, in press)。1990 年代から 2010 年代の結果のみを考慮すれば、同じ時間幅のアメリカ英語のデータを扱っているにも関わらず、結果が異なっている。これには、用例を抽出する際の手順の相違が背景にあるのかもしれない。というのも、COCA の調査の際には、話し言葉に絞ってデータを取ったからだ。一方、本調査では、雑誌等の書かれた言語データも含んでいる。雑誌の場合、引用 *be + like* が頻出するのは、インタビューでの発話を文字起こしした部分である。それゆえ、編集者により削られた文言もあれば、言い誤りや文法的誤りが訂正されている箇所がある可能性が浮上し、現在形で用いられていた引用 *be + like* が、文脈を鑑みて過去形に変えられた用例がある可能性も否めない。今後、COHA のデータにおいても雑誌等の書かれた言語データを除いて再検証する必要がある。

5. 結論

本調査では、大規模アメリカ英語コーパスを用い、引用 *be + like* の通時的な用法の変化を観察した。その結果、1990 年代に急激に用例数が増加すること、1 人称主語と 3 人称主語の出現頻度にはあまり差がないこと、時制形式は過去形が好まれる傾向にあることが示された。引用導入表現としての *be + like* が出現し、その発展において先駆的な地位にあるアメリカ英語内での用法について、長期的かつアメリカ英語一般に見られる特徴を詳らかにした上で、他の英語の変種との比較を行うことが、この表現の包括的な理解に繋がると考える。本調査は、文法的側面という点においてその目標に資する研究となり得るだろう。

参考文献

- Blyth, C., Recktenwald, S., & Wang, J. (1990). I'm like, "Say what?!": A new quotative in American oral narrative. *American Speech*, 65(3), 215-227.
- Buchstaller, I. (2001). An alternative view of *Like*: Its grammaticalisation in conversational American English and beyond. *Edinburgh Working Papers in Applied Linguistics*, 11, 21-41.
- D'Arcy, A. (2017). *Discourse-pragmatic variation in context: Eight hundred years of LIKE*. Amsterdam: John Benjamins.
- Ferrara, K., & Bell, B. (1995). Sociolinguistic variation and discourse function of constructed dialogue introducers: The case of *be + like*. *American Speech*, 70(3), 265-290.
- Mizokami, E. (in press). The quotative *be + like* and the historical present in spoken English. *Human and Environmental Studies*, 30.
- Romaine, S., & Lange, D. (1991). The use of *like* as a marker of reported speech and thought: A case of grammaticalization in progress. *American Speech*, 66(3), 227-279.
- 澤田茂保 (2011). はなし言葉と直接引用: real-time の発話での直接引用形について 言語文化論叢, 15, 1-26.
- Schourup, L. (1982). Editor's note on [Quoting with go 'say']. *American Speech*, 57(2), 148-149.
- 白水桂子 (2012). 発話における引用表現 *be like* の機能について 経営と経済, 91(4), 161-172.
- Singler, J. V. (2001). Why you can't do a VARBRUL study of quotatives and what such a study can show us. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics*, 7(3), 257-278.
- Tagliamonte, S., & D'Arcy, A. (2007). Frequency and variation in the community grammar: Tracking a new change through the generations. *Language Variation and Change*, 19(2), 199-217.